学習日　　月　　日

第三章 27 短歌・俳句 (1)

例題 ①

A　あしひきの山のしづくに*妹待つとわれ立ちぬれぬ山のしづくに
　　大津皇子

B　ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なるひとひらの雲
　　佐佐木信綱

C　金色のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に
　　与謝野晶子

D　ふるさとの山に向かひて
　言ふことなし
　ふるさとの山はありがたきかな
　　石川啄木

（注）妹＝妻。恋人。

(1) 短歌の形式について説明した次の文の［　］に入る最も適切なことばを、それぞれあとから選び、記号で答えなさい。（同じものを何度でも選べます）

〈短歌は、［①］・［②］・［③］・［④］・［⑤］の合計三十一音から成る［⑥］詩です。〉

ア 五　イ 七　ウ 自由　エ 定型

(2) 次の①～⑤の表現技法が用いられている短歌を、それぞれA～Dから選び、記号で答えなさい。

① 体言止め　② 字余り　③ 枕詞
④ 倒置法　⑤ 比喩

(3) Dの短歌は、意味や調子の上から二つに分けることができます。その場合の前半部分を短歌の中から書きぬいて答えなさい。

(4) A～Dの短歌の主題を、それぞれ書いて答えなさい。

解法のポイント

短歌の形式　短歌は、**五・七・五・七・七**（三十一音）の**定型**詩です。五・七・五・七・七の各句は、順に、初句・二句・三句・四句・結句と言い、前半の五・七・五を上の句、後半の七・七を下の句と言います。

①＝**ア**　②＝**イ**　③＝**ア**　④＝**イ**　⑤＝**イ**　⑥＝**エ**

表現技法　短歌特有の表現として次のものを覚えておきましょう。

○字余り・字足らず

短歌で、五・七・五・七・七の定型より音数の多いことを字余り、少ないことを字足らずと言います。Dの短歌は、「ふるさとの（五音）／山に向かひて（七音）／言ふことなし（六音）／ふるさとの山は（八音）／ありがたきかな（七音）」で、三句・四句が定型よりも多い音数になっています。

○枕詞

枕詞とは、「山」「母」などの特定の語を修飾する五音の語で、それ自体は意味を持ちません。**例**「あしひきの（→山）」「たらちねの（→母）」

①＝**B**　②＝**D**　③＝**A**　④＝**A・C**　⑤＝**C**

句切れ　句切れは、口語に訳して「。」がつく場所にあります。Dの短歌は、「ふるさとの山に向かって言うことがない。」という内容が短歌の前半部分に当たります。

(4) **主題**　短歌をくり返し読んで作者の心情にせまりましょう。

A＝妻（恋人）への愛情。　B＝晩秋の大和の空の美しさ。
C＝銀杏の散る風景の美しさ。　D＝ふるさとのなつかしさ。

例題 ②

A　荒海や佐渡に横たふ天の河
　　松尾芭蕉

B　山は暮れて野はたそがれのすすきかな
　　与謝蕪村

C　雪とけて村一ぱいの子どもかな
　　小林一茶

D　いくたびも雪の深さを尋ねけり
　　正岡子規

(1) 俳句の形式を説明した次の文の［　］に入る最も適切なことばを、それぞれあとから選び、記号で答えなさい。（同じものを何度でも選べます）

〈俳句は、［①］・［②］・［③］の合計十七音から成る［④］詩です。〉

ア 五　イ 七　ウ 自由　エ 定型

(2) A～Dの俳句から、それぞれ切れ字を書きぬいて答えなさい。

(3) A～Dの俳句の季語と季節を、それぞれ書いて答えなさい。

解法のポイント

(1) **俳句の形式**　俳句は、**五・七・五**の合計十七音から成る**定型**詩です。

(2) **切れ字**　切れ字は、俳句の中や終わりで、言い切る働きをすることばです。主な切れ字として「や」「かな」「けり」を覚えておきましょう。

A＝や　B＝かな　C＝かな　D＝けり

(3) **季語と季節**　俳句には必ず季語があります。たとえば、春の季語には「梅」「桜」「若草」などが、夏の季語には「五月雨」「若葉」などが、秋の季語には「名月」「虫の音」などが、冬の季語には「枯野」などがあります。

A＝天の河（秋）　B＝すすき（秋）
C＝雪とけて（春）　D＝雪（冬）

確認問題

1 次のそれぞれの短歌を味わい、あとの問いに答えなさい。

A　その子二十歳櫛にながるる黒髪のおごりの春の美しきかな
　　与謝野晶子

B　いちはつの花咲きいでてわが目には今年ばかりの春行かんとす
　　正岡子規

C　いつしかに春の名残となりにけりこんぶ干場のたんぽぽの花
　　北原白秋

□(1) **表現技法**　A～Cの短歌から、①体言止めを用いている短歌と、②字余りの短歌を、それぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

①	
②	

□(2) **句切れ**　Cの短歌の句切れとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 初句切れ　イ 二句切れ　ウ 三句切れ
エ 四句切れ　オ 句切れなし

□(3) **主題**　A～Cの短歌についての解説として最も適切なものを、それぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア 来年まで生きられるかわからない悲しみを静かに歌っている。
イ 人生で最も美しく、勢いのある時期について歌っている。
ウ 生命力がみなぎる春の自然を興味深く見つめている。
エ 目立たない小さな生物に温かい目を注いでいる。

A	
B	
C	

2 次のそれぞれの短歌を味わい、あとの問いに答えなさい。

A　子どもらは列をはみ出しわき見をしさざめきやめずひきゐられていく
　　木下利玄（きのしたりげん）

B　お父さまと書きそへて肖像画（しょうぞうが）＊はられありなんといふわが鼻のひらたさ
　　宮柊二（みやしゅうじ）

（注）はられあり＝はられてある。

(1) **表現技法** A・Bの短歌について説明した次のそれぞれの文について、合っているものには○、合っていないものには×で答えなさい。

□① Aの短歌、Bの短歌ともに字余りの歌である。

□② Aの短歌では比喩（ひゆ）が用いられている。

□③ Bの短歌では体言止めが用いられている。

□④ Bの短歌は三句切れの歌である。

①	
②	
③	
④	

(2) **主題** A・Bの短歌の主題を説明した次の文章の［　］に入る最も適切なことばを、それぞれあとから選び、記号で答えなさい。

〈Aの短歌は、小学校の［①］の情景でしょう。子どもたちの［②］様子が［③］歌われています。Bの短歌は、小学校の［④］なのでしょうか。父親が、わが子が描いた父親の絵を見て、その鼻の平たさに［⑤］しながらも、わが子をかわいいと思っている様子が伝わります。〉

ア　運動会　　イ　参観日　　ウ　遠足
エ　授業　　オ　暴れる　　カ　はしゃぐ
キ　味わい深く　　ク　ほほえましく　　ケ　格調高く
コ　しんみり　　サ　うっとり　　シ　がっかり

①	
②	
③	
④	
⑤	

3 次のそれぞれの俳句を味わい、あとの問いに答えなさい。

①　古池や［　　］飛び込む水の音（春）　　松尾芭蕉（まつおばしょう）
②　［　　］を集めて早し最上川（もがみがわ）（夏）　　同
③　［　　］や池をめぐりて夜もすがら（秋）　　同
④　＊不二（ふじ）ひとつうづみのこして［　　］かな（夏）　　与謝蕪村（よさぶそん）
⑤　楠（くす）の根をしづかにぬらす［　　］かな（冬）　　同

（注）不二＝富士山（ふじさん）。

(1) **季語と季節** ①～⑤の俳句は（　）内の季節を詠（よ）んだものです。これを参考にして、［　　］に入る適切な季語を、それぞれ次から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　若葉　　イ　かはづ（蛙（かえる））　　ウ　時雨（しぐれ）
エ　五月雨（さみだれ）　　オ　名月

①	
②	
③	
④	
⑤	

(2) **俳句の歴史** 松尾芭蕉によって書かれた紀行文集を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア『万葉集』　　イ『徒然草（つれづれぐさ）』
ウ『おくのほそ道』　　エ『土佐（とさ）日記』

［　　］

(3) **俳句の歴史** 松尾芭蕉・与謝蕪村と同じ江戸時代の俳人を次から一人選び、記号で答えなさい。

ア　石川啄木（いしかわたくぼく）　　イ　小林一茶（こばやしいっさ）
ウ　正岡子規（まさおかしき）　　エ　紀貫之（きのつらゆき）

［　　］

4 次のそれぞれの俳句を味わい、あとの問いに答えなさい。

A　流れ行く大根の葉の早さかな　　高浜虚子（たかはまきょし）
B　山路きてなにやらゆかしすみれ草　　松尾芭蕉（まつおばしょう）
C　きつつきや落葉を急ぐ牧の木々　　水原秋桜子（みずはらしゅうおうし）
D　校塔（こうとう）に鳩多き日や卒業す　　中村草田男（なかむらくさたお）
E　名月や畳（たたみ）の上に松の影（かげ）　　榎本其角（えのもときかく）
F　やがて死ぬけしきは見えず蟬（せみ）の声　　松尾芭蕉（まつおばしょう）

□(1) **表現技法** 体言止めが用いられている俳句をすべて選び、記号で答えなさい。

［　　］

□(2) **季語と季節** それぞれの俳句から、季語を書きぬいて答え、それが表す季節を書いて答えなさい。

E	C	A
F	D	B

(3) **主題** A～Fの俳句から、次のそれぞれの解説文にあてはまるものを一つずつ選び、記号で答えなさい。

□① 作者は、道端（みちばた）にひっそりとたたずむ花に親しみを覚えている。

□② 作者は、思い出にひたりながら晴れやかな喜びに満ちている。

□③ 作者は、擬人法（ぎじんほう）を用いて、高原の風景を描（えが）いている。

①	
②	
③	

5 次のそれぞれの俳句を味わい、あとの問いに答えなさい。

A　しづかさや岩にしみ入る蟬（せみ）の声　　松尾芭蕉（まつおばしょう）
B　あらたふと青葉若葉の日の光　　松尾芭蕉
C　旅に病んで夢は枯野（かれの）をかけめぐる　　松尾芭蕉
D　五月雨（さみだれ）や大河を前に家二軒（にけん）　　与謝蕪村（よさぶそん）
E　むまさうな雪がふうはりふうはりと　　小林一茶（こばやしいっさ）

□(1) **切れ字** Aの俳句から切れ字を書きぬいて答えなさい。

［　　］

□(2) **季語と季節** Dの俳句から季語を書きぬいて答え、それが表す季節を書いて答えなさい。

［　　］

□(3) **主題** A～Eの俳句の解説文として最も適切なものを、それぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア　松尾芭蕉の辞世の句（死ぬ前に詠（よ）む短歌や俳句）と言われている。旅に生き、旅に死ぬことを願った芭蕉らしい句である。

イ　大自然の荒々しい力を前にして、人間の営みの小ささ、たよりなさを対比している。

ウ　初夏のさわやかな日ざしの中で、自然の美しさを仰（あお）ぎ見ている句である。

エ　何の物音も聞こえない深い山の中で、たった一つ聞こえる音も、かえってその静けさを印象づけている。

オ　擬態語を交えて、まるで子どものような無邪気（むじゃき）さで冬の楽しみを詠んでいる。

A	
B	
C	
D	
E	

28 短歌・俳句 (2)

学習日　　月　　日

練成問題

1 次のそれぞれの短歌を味わい、あとの問いに答えなさい。

A　ひさかたの光のどけき春の日にしづこころなく花の散るらん
　　紀友則（きのとものり）

B　くれなゐの二尺のびたる薔薇（ばら）の芽の針やはらかに春雨のふる
　　正岡子規（まさおかしき）

□(1)　A・Bの短歌に共通して、くり返し用いられて歌のリズムを整えているひらがな一字を書きなさい。

□(2)　Aの短歌から、枕詞（まくらことば）を書きぬいて答えなさい。

□(3)　Bの短歌についての説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　対象をよく観察して、写生している。
イ　自分の心情を率直に表現している。
ウ　新しい季節の到来を心の底から喜んでいる。
エ　五感をフルに働かせて、情景をとらえている。

2 次の短歌と解説文を読んで、あとの問いに答えなさい。

やはらかに柳（やなぎ）あをめる
北上（きたかみ）の岸辺目に見ゆ
泣けとごとくに

柳の木がやわらかく青い新芽を吹いている北上川の岸辺が目に浮かんできます。この歌は、啄木が［①］で暮らしているときに故郷を思って歌ったものです。「目に見ゆ」とありますが、実際に目に見えていたわけではなく、心の目になつかしい故郷の風景が見えていたということです。都会暮らしで傷ついた心をなぐさめるように、啄木は自分自身のために泣いています。啄木には、このような［②］の念を歌った歌が多くあって、

ふるさとの訛（なまり）なつかし
停車場の人ごみの中に
そを聴きにゆく

もその一つです。都会でひとり過ごすとき、実際の故郷には帰れないが、せめて「［③］」だけでも耳にしたくて、人があふれる［④］へと向かう、という啄木の行動からは、強い望郷の思いが伝わってきます。

石川啄木（いしかわたくぼく）

□(1)　「やはらかに柳あをめる／北上の岸辺目に見ゆ／泣けとごとくに」の短歌に用いられている表現技法を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　倒置法　　イ　対句　　ウ　反復　　エ　枕詞（まくらことば）

□(2)　［①］～［④］に入る最も適切なことばを、それぞれ短歌または解説文の中から書きぬいて答えなさい。

③	①
④	②

3 次のそれぞれの短歌を味わい、あとの問いに答えなさい。

A　霜やけの小さき手してみかんむくわが子しのばゆ風の寒きに
　　落合直文（おちあいなおぶみ）

B　しばらくを三間（みま）うち抜（ぬ）きて夜ごと夜ごと児（こ）らが遊ぶに家わきかへる
　　伊藤左千夫（いとうさちお）

C　隣室（りんしつ）に書読（ふみよ）む子らの声聞けば心にしみて生きたかりけり
　　島木赤彦（しまきあかひこ）

D　石がけに子ども七人腰（こし）かけて河豚（ふぐ）を釣（つ）りをり夕焼け小焼け
　　北原白秋（きたはらはくしゅう）

E　泣く力今はなくなり病める子の眼（まなこ）つぶらにわれを見るかも
　　木下利玄（きのしたりげん）

□●　A～Eの短歌についての説明として最も適切なものを、それぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア　作者は重い病気のようです。もし自分が死んだらこの子たちはどうなるのだろうという親の切ない思いが歌われています。
イ　作者の子どもは重い病気です。どうしてやることもできない親の無力感と悲しみがあふれています。
ウ　童謡（どうよう）の世界をそのまま歌ったような楽しさがあり、影絵のような情景が浮かび上がります。
エ　作者は旅先にいるのでしょうか。家に残してきた子どものことをしきりに気にかけています。
オ　作者は、子どもにめぐまれ、その子たちを深く愛しました。はしゃぎ回る子どもたちで作者の家はてんやわんやです。

A	
B	
C	
D	
E	

4 次の短歌と解説文を読んで、あとの問いに答えなさい。

A　石走る垂水（たるみ）の上のさ蕨（わらび）の萌（も）え出（い）づる春になりにけるかも
　　志貴皇子（しきのみこ）

B　ひさかたの光のどけき春の日に静心なく花の散るらむ
　　紀友則（きのとものり）

まだまだ冷たい清冽（せいれつ）な滝の水のかたわらに、あどけない幼子の手のような蕨が土を割って頭をもたげています。「ああ、春なのだ」、つくづくと自然を見つめた万葉歌人らしい生命への共感があふれた一首です。

風もないうららかな春の日に、はらはらはら、花は命の必然に従って音もなく散ってゆくばかりです。こんな日に、どうして花よ、おまえだけが静かな心もなく散ってゆくのかと、友則はいぶかしむように歌っています。何一つ欠けるものもない春の一日、ただ花の命にすれちがってゆく甘美（かんび）さと悲しみが混じり合っているようです。

〈米川千嘉子「四季のことば100話」より〉

□(1)　Aの短歌から感じ取れる作者の気持ちとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　春が来た喜び。　　イ　滝の水の清冽さへの感動。
ウ　去りゆく春への未練。　　エ　小さな蕨への愛情。

□(2)　Bの短歌に歌われている桜の花の様子として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　ひっそりと目立たぬように時間をかけて少しずつ散る様子。
イ　いかにも気持ち良さそうにふわりふわりと舞い散る様子。
ウ　その美しさを見せつけるかのように優雅（ゆうが）に舞い落ちる様子。
エ　まるで自らの意志で散り急ぐかのように休みなく散り続ける様子。

5 次のそれぞれの俳句を味わい、あとの問いに答えなさい。

A　五月雨を集めて早し最上川　松尾芭蕉
B　海に出て木枯らし帰るところなし　山口誓子
C　しんしんと雪降る空にとびの声　川端茅舎
D　菜の花や月は東に日は西に　与謝蕪村
E　ねむりても旅の花火の胸にひらく　大野林火

□(1) A～Eの俳句から、①初句切れのものと、②二句切れのものを一つずつ選び、記号で答えなさい。

①	
②	

□(2) A～Eの俳句から、それぞれの季語を書きぬいて答え、それが表す季節を書いて答えなさい。

E	C	A
	D	B

□(3) A～Eの俳句の主題として最も適切なものを、それぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア　おそろしいほどの自然の勢い。
イ　心に残る、はなやかでさわやかな夏の風物詩。
ウ　色あざやかで広々とした、雄大な景色。
エ　しんとした静けさを突き破るもの。
オ　自然現象へと寄せる親しみの念。

A	
B	
C	
D	
E	

6 次のそれぞれの俳句を味わい、あとの問いに答えなさい。

A　福寿草家族のごとくかたまれり　福田蓼汀
B　空をゆくひとかたまりの花吹雪　高野素十
C　戦争が廊下の奥に立つてゐた　渡辺白泉

□(1) A～Cの俳句の季節として最も適切なものを、それぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア　春　イ　夏　ウ　秋　エ　冬　オ　無季

A	
B	
C	

□(2) A～Cの俳句から、①体言止めを用いているもの、②直喩による擬人法を用いているもの、③隠喩による擬人法を用いているものを一つずつ選び、記号で答えなさい。

①	
②	
③	

□(3) A～Cの俳句についての説明として最も適切なものを、それぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア　人々が気づかないうちにすぐそこまでやってきていた大きな不幸の影を表現している。
イ　季節の盛りの時期の美しい情景を、そのはなやかな動きとともにとらえている。
ウ　温かみが感じられる、和やかな自然の様子を描いて、平安が続くことをいのっている。
エ　厳しい自然に負けまいとして力強く生きていくたくましさが描かれている。

A	
B	
C	

7 次のそれぞれの俳句を味わい、あとの問いに答えなさい。

A　雀らも海かけて飛べ吹き流し　石田波郷
B　学問のさびしさに堪へ炭をつぐ　山口誓子
C　赤とんぼ＊筑波に雲もなかりけり　正岡子規
D　万緑の中や＊吾子の歯生え初むる　中村草田男
E　玉のごとき小春日和をさづかりし　松本たかし
（注）筑波＝茨城県にある筑波山。
吾子＝わが子。

□(1) A～Eの俳句から、それぞれの季語を書きぬいて答え、それが表す季節を書いて答えなさい。

E	C	A
	D	B

□(2) Dの俳句の句切れはどこですか。それを示した場合に最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　万緑の／中や吾子の歯生え初むる
イ　万緑の中や／吾子の歯生え初むる
ウ　万緑の中や吾子の歯／生え初むる
エ　万緑の中や吾子の歯生え／初むる

□(3) Eの俳句の「小春日和」の読み方をひらがなで書いて答えなさい。

□(4) A～Eの俳句について解説した次の文章の［　］に入る最も適切なことばを、それぞれあとから選び、記号で答えなさい。

Aの句は［①］が用いられていて、「雀ら」に［②］を送っています。小さな生き物への愛情がこめられた句です。
Bの句では、今ではめったに見られなくなった火鉢に炭をつぐ光景が詠まれています。学問とは本来［③］なものだ、それに堪えなければならないという作者の覚悟が感じられます。
Cの句は、雲一つなく晴れ渡った空に赤とんぼが飛ぶ光景を率直に詠んでいます。作者の晴れ晴れとした［④］な気分が伝わってきます。
Dの句は、赤ん坊の口の中に初めての歯が生えているのを見つけた親の感動を詠んでいます。万緑と白く輝く歯との色彩の［⑤］が鮮やかです。
Eの句は、寒さが続く中で、珍しく春のような暖かい一日に恵まれた喜びを詠んでいます。「さづかりし」と［⑥］を用いているところに、自然からの恵みに対する作者の感謝の念が表れています。「玉のごとき」という［⑦］も適切です。

ア　対比表現　イ　体言止め　ウ　声援
エ　残念　オ　敬語　カ　倒置法
キ　明朗　ク　孤独　ケ　直喩表現

①	
②	
③	
④	
⑤	
⑥	
⑦	